

男女共学

# 京都精華大学

1980・入学案内





山口耕一郎

(京都・鴨沂高堂・立体造形74年度)

精華という一言を口づさんでみる。熱いものがグッとわきあがってくる。ほくにとってそれは、ただ懐しむだけの対象ではなく現実でさえあるような気がするからだ。そこには、まぎれもない自然があり、自由を獲得できる空間がある。もし、今、君達が何かをつかみ取りたいと思っているなら、その自由な創造空間は限りなく広がりを見せることだろう。そして、どれだけ新鮮な目でこの空間にはたらきかけるかによって、さまざまな色彩を帯びた反応がかえってくるにちがいない。やろうと思いたったら、まず、やってみよう。もし、最も自分らしく自然な姿でありたいと思う君なら、一度その若さにまかせてこの空間に挑戦してみないか。そして、自分のその手で独自の自由世界を創りあげてみないか。多くの精華での三年間は常にそのことであわただしく過ぎ去った。そして、社会へ出た今、新たに独自の自由世界を創ろうともくろんでいる。

● photo: 本館附近

● 表紙 渡辺扶希見(デザイン3年)

青年層（つまり受験生諸君もふくまれることになるのであろうが）の流行語を調査してみたが、その中からばくは次の四つを、ここでチェックしてみたい。①ワン・パターン、②八丈島のキヨシ、③ミッチーの「激（げき）れ」、④所ジョージ・ブームである。

①の「ワン・パターン」とは、一つの型でしか行動できないこと。ということは、多様なものに対応できかねることになるから、ヘマや失敗をしがちである。ヘマや失敗をすると、「ワン・パターンだな」と当人は頭をかき、仲間も「おまえ、ワン・パターンやな」と指摘する。ただし、エチケツトを心得た現代青年は、相手をなじるように指を相手につきつけず、相手と自分の中間地帯に向って、指を下におろす。その意味は、「おれも、ワン・パターンのなのだが……」という表現が、ふくまれてくるのだ。②の「八丈島のキヨシ」とは、ご存じ人気マンガの「ガキ（少年）デカ（警察官）がなにかに失敗したとき、八丈島の鹿に変身し、照れかくしに前の左足と後の右足を宙にあげる。これをマネて青年たちは、ヘマや失敗

をしたとき、左手・右足をあげ、それをひねるようにしながら身体をくねらせ、ヘマや失敗の免罪符を獲て、非難から身をかわそうとする呪術である。この①も②も、自分を護ろうとする傾向のものである。

③の「ミッチーの『激れ』」とは、カムバックした初老歌手三橋美智也が、映画「サアターデイ・ナイト・ファイバー」の若い主演トラボルタ風のデイスコ衣装を無理して（？）着込み、右手で天、左手で地を指さし、「激れ！」と若者たちにカツを入れるのが、うけているのだ。教師やおやじの叱咤は嫌だが、初老歌手の風俗的叱咤は好きだということ、つまり、「頑張らなければならぬこと」は自分でわかっているが、監視される奴から言われるのは嫌だという青年心理のあらわれであろう。④の「所ジョージ・ブーム」とは、ご存じロック・シンガーの黒ジャンパー・黒めがねの矢沢永吉が「おれは成りがりだ」とミエを切ったのに対し、同じ黒ジャンパー・黒メガネの所ジョージが「おれは成りがりだ」と、成りがりがりを成りがりがりで切り返したのが、うけているのである。この③と④の流行語

には、青年層の「自分を何とかしなければならぬ」積極的な志向が、うかがえる。もちろん、雰囲気的に「激れ！」と言われてスツとしたところでどうにもならないし、「成りがりがり」「成りがり」のアップ・ダウン的ゲームを楽しんだところでなんら収穫はあるまい。

流行とは、その時代時代の社会現象が、つよくあらわれたものである。ぼくは、「流行」を問題にしているのではない。右に述べたような、青年層の社会現象を問題にしているのである。いいかえれば、「ワン・パターン」とか「八丈島のキヨシ」でヘマや失敗や責任をカムフラージし、「ミッチーの『激れ』」や「所ジョージ・ブーム」で心の内部にせっかく持っている貴い積極的志向を発散させている現代青年層の社会現象を、採りあげたいわけである。ここには、一見、現代青年たちは呑気そうに見えるが、実は、やっぱり悩み・苦労し・求めているのだが、それが打開できずに、「流行」という一種の代償行為で、コンプレックスやストレスを解消している——という社会現象が、ある

わけである。

本学を志望する受験生諸君も、このことをよく考えていただきたい。われわれ大学側教職員も、このことをよく考えたい。現代にあつて、教育とは、いかに学生ひとりひとりに、しっかりとした自己形成を促す、自信と自覚と、できるならば自持さえも持つてもらふことが、不可欠の基本なのであるまいか。自己形成・自信・自覚（できれば自持）なくして納得のゆく制

作はできまいし、充実した自分の生き方も望めまい。

もちろん、そうした自己形成や自信や自覚は、簡単にできるものではないし、できたと思っても何回も壁にぶちあたりつつ再形成を繰り返さなければならぬものである。

本学は、何よりも「自由自治の精神」を大切にしている。ひとりの人間として、ひとつの個性として、（美術学部の学生なら、

一人の作家として）、自己を鍛え自己の内面を豊かに充実させようとする者を、その努力を惜しまない者を、積極的に歓迎したい。つまり、悩み・苦労し・求めるものをもつ学生たちが自分の納得のゆく自己形成をしよう／＼と、本学に学びに来てもらいたいのである。

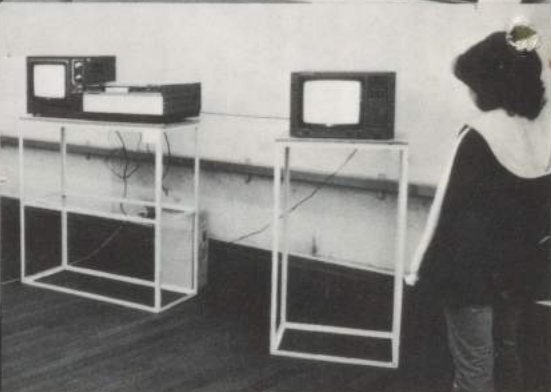
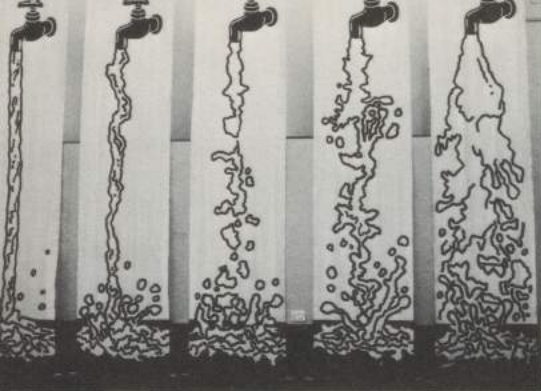
学長／深作光貞

# 学科課程概要

## もくじ

- 4 一般教育
- 7 図書館
- 8 短期大学部・英語英文科
- 18 美術学部
- 30 アssenブリー・アワー

- 32 学寮
- 34 卒業後の進路
- 36 クラブ
- 42 教員組織
- 44 教職員紹介
- 51 大学への交通機関



1979年 学外展(京都市美術館)

